

基調講演

「がん化学療法における漢方薬の役割」

富山大学 第三内科
細川 歩

がん化学療法は様々な副作用を引き起こすため、QOLを低下させることや治療成績に大きな影響を与えることがある。化学療法の副作用は支持療法の発達により軽減されるようになってきているが、その効果が不十分であることも少なくない。近年、抗がん剤の様々な副作用に対する漢方薬の効果が検討されており、シスプラチンの悪心・嘔吐に対する六君子湯、オキサリプラチンやパクリタキセルの末梢神経障害に対する牛車腎気丸・芍薬甘草湯や塩酸イリノテカンの下痢に対する半夏瀉心湯などの効果が報告されている。漢方薬は長い歴史を有し、わが国では比較的馴染みのある薬剤であることや安価であるために日常診療で使いやすい利点がある。一方、漢方薬そのものの副作用は一般的に少ないと認識されているが、これまでその安全性は十分に評価されているとは言い難く不明な点も多い。したがって、抗がん剤の副作用に対する漢方薬の効果はもちろんのこと、漢方薬そのものの安全性や、漢方薬の抗がん剤の抗腫瘍効果に対する影響を検証する必要がある。現在、抗がん剤の副作用に対する漢方薬の効果を検証する臨床試験が展開されており、新しいエビデンスの構築が期待されている。